

ずいそう

## ありがとうイチロー

山原茂樹



1995年1月17日午前5時46分：阪神淡路大震災発生。

ようやく復興の槌音が聞こえ始めた4月、私は妻と生後半年に満たない息子をひとまず東京に残し、壊滅した神戸に転勤をする。

住宅やビル、鉄道や高速道路の高架までもが倒壊し、国道2号線を重量20トン鉄履帯の重機がガチャガチャと金属音を立てて横切る。

学生時代からバイクが好きで、機動性を見込んで借りた足つき性のよい原付スクーターでさえ何度も道路の陥没と砂埃にタイヤを取られ転倒しそうになった。

加えて同じ路線には解体ガラを積んだ大型ダンプがバンバン走り、とにかく怖い。

地元の建機販売会社のリストを参考に“そこにあった筈”のユーザ住所を訪ね歩く。

焼け野原の一面は、昔ながらのアーケード街だったそう。総菜屋が早朝の仕込みに火を使っていたと聞いた。終戦後の風景はこんなだったのかな？と思った。

「コマツのお兄ちゃん？ 東京から来たんか？」

初対面でも、避難先や架設テントに招き入れられ食事を振舞って頂くこともあった。

自分の存在を確認してくれる人や組織がいる事により喜びを感じている様だった。

その年『がんばろう KOBE』を掲げ、当時神戸に本拠地をおいたプロ野球球団BW軍が悲願のリーグ優勝を果たす。日本シリーズでは名将野村克也氏率いるS軍に敗れはしたが、翌年G軍を倒して日本一。大いに神戸の心の支えとなった。

野球は子供の頃から嫌いではない程度。パ・リーグには興味なしの私だったが、一神戸市民として祈る様な気持ちでテレビ観戦をした（1995年日本シリーズ第4戦、BW軍プロ3年目投手小林宏が投じたS軍4番Tオマリーへの14球は特に印象に残る名場面だ）。

その後、一軍だけでなく二軍の試合観戦にも度々球場に足を運ぶ様になった。

二軍の試合は将来一軍で活躍する若手選手から調整中のスター選手、コーチとなった元名プレーヤーまで比較的間近で見る事や触れ合う事ができる別の楽しさ

がある。

息子を連れてナイター観戦に行った時の事。

延長戦を最後まで楽しんだ後、家に帰ると「幼稚園児を連れて何時だと思っているの！」と妻からひどく怒られた。

息子も喜んでいたので私の都合だけではないが、親としてごもっともな御意見に納得する他ない。しかし、このスリコミのおかげ？で野球熱は息子に伝播する。

そこにスター街道を歩みはじめたイチローがいた。

気が付けば、幼少時の写真は“ウルトラマンが両腕を十字に交差するポーズ”から“イチローが打席に立った時に投手に向けてバットを立てる姿”に変わり、ピアノの発表会の楽曲でさえ『Take Me Out to the Ball Game（私を野球につれてって）』になった。

グリーンスタジアム神戸で見たイチローの捕殺は鮮明に覚えている。後にアメリカで『レーザービーム』という異名がついた。後にも先にもあれを超える送球を見た事がない。

派手ではあるが、満塁逆転ホームランなどではない“ただの送球”だ。

それでも、その芸術的プレーに魅了された。

修行僧の様な凛とした佇まい、何気ないプレーに宿るプロとしての凄み。

それは、イチローの哲学=生き方の体現である。

『自己管理をする事』『納得できる準備をする事』『道具を大切にすること』

時にチームメイトや周囲から理解されず、孤独を感じていたと聴く。

しかし曲げない。そんなイチローをずっと見て来た。

彼の貫いた生き方が野球の次元を超え、私達親子の心の支えや勇気にもなった様に思う。

平凡なサラリーマン人生で私には何一つ誇れる成果もない。

ただ、「非凡なものがないからこそ、せめてそうありたい」という憧れに似た気持ちだけはいつも持ち続けたという事で冷笑いただければ幸いです。

「サラリーマン社会、特に営業という世界で生きる

には周囲との和を大切に、自己主張も“ほどほどに”という面も必要。」というのは私の言い訳であり、一面の真理であろう。

だからこそ、彼の生き様に惹かれたのかも知れない。イチローが日米野球界で築き上げた成果は今更語るまでもない。

息子にとってイチローはもはや『神』である。

2019年3月：東日本大震災からの復興工事が続く仙台に単身赴任していた私は、社会人となった息子の誘いで東京ドームに合流し、米メジャーリーグ開幕カードを観戦する。

これが奇しくもイチロー現役最後の試合となった。

観客のスマホに現役引退の情報が流れてからは一打席毎、会場総立ちになる。

隣の席では私達と同じ世代の親子が祈る様に両手を合わせ、涙を流し声援を送る。

最後の1本は出なかったが、最高に思い出に残る

ゲームとなった。

アメリカでの野球殿堂入り確定と言われるスターとはいえ一人の日本人選手と日本のファンの為に開幕カードを費やすアメリカの懐の大きさにも驚いた。

球界をあげて功労者に対する『敬意』を具現化する文化が根付いているのだろう。

試合終了後も帰らぬファンに応えるべく、フィールドを一周したイチローの雄姿も忘れられない。

希代のプレーヤーと同じ時代を過ごし、最期を見届ける事ができた。

ただ一言感謝の言葉「ありがとうイチロー」を届けたい。

2020年4月：コロナ禍の札幌に着任した。2023年ボールパークの完成が待ち遠しい。

——やまはら しげき

コマツカスタマーサポート(株) 北海道カンパニー 社長——

